

東南アジアにおける祖師信仰

二階堂 善 弘

Ancestor beliefs in Southeast Asia

NIKAIDO Yoshihiro

This report describes the ancestry beliefs related to Chinese temples in Southeast Asia. Chinese temples in Southeast Asia are dedicated to the Qingshui Zushi, Sanping Zushi, Songdafeng Zushi, Cankui Zushi, and other ancestors. I investigate Chinese temples such as the Snake Temple, Melaka Poh Onn Kong in Malaysia, Sembawang God of Wealth Temple, Nam Hong Siang Theon, Chong Pang Combined Temple, and the Tampines Chinese Temple in Singapore.

キーワード：中華圏 (Greater China)、民間信仰 (Folk Religion)、僧侶 (Monk)、神廟 (Temple)

前 言

日本の寺院では、開山堂が設置されていることが多い。これは、その寺院を開いた僧侶を祀るものである。一方で、中国の寺院では、伽藍殿の対面に、祖師殿が配置されることが多い。日本でも祖師堂を備えることは、日蓮宗の寺院などでよく見かける。

「祖師」という称号は、日本の場合、特定の宗派の開祖を指す場合が多い。そして、祖師信仰とは、その宗派の祖師に対する信仰を指す。日本では、真言宗の弘法大師空海に対する信仰は民間にも広まっており、これは「大師信仰」とも称される。浄土宗の法然上人、浄土真宗の親鸞聖人、日蓮宗の日蓮聖人、曹洞宗の道元禪師に対する信仰なども、日本ではかなり有力な祖師信仰と言えるであろう。

中国にも当然、同じ意味での祖師信仰は存在している。天台宗の智者大師、すなわち天台智顛に対する信仰などがそれに当たる。また禪宗の祖とされる達磨大師に対する信仰も強く、達磨祖師と称され、多くの仏寺で尊崇されている。そのため寺院の祖師殿においては、達磨大師像をよく見かける。

しかし、現在中華圏で見られる祖師という称号は、宗派の開祖だけに使われるものではなく、もう少し広い意味の、高僧一般の呼び名ともなっている¹⁾。

しかも、こういった高僧は、寺院ではなく、民間の廟で祀られることが多い。そのため、研究者によってはこれを「仏教俗神」と呼ぶことがある²⁾。

信仰されている祖師のなかで知名度が高いのは、福建や台湾で広く祭祀される清水祖師であろう。福建や台湾、また東南アジアの各地では、いたるところで清水祖師廟を見ることができ。しかし、清水祖師は特定の宗派の開祖というわけではなく、また号は「昭応大師」で、あくまで大師号である。

東南アジアの華人廟で実際に見る「祖師」は、清水祖師、三坪祖師などの高僧であって、宗派の祖である人物のほうではない。また寺院ではなく、民間信仰の廟で見ることが多い。本論では、これらの祖師たちの祭祀について検討したい。

1) そのために、「祖師信仰」という語を使うのは不適切であり、「高僧信仰」と称するべきであるという意見もある。ただ、本論では多くの廟で使用している「祖師」の称号をそのまま使うことにしたい。これについては、「維基百科」(<https://zh.wikipedia.org/wiki/>)の「高僧信仰」、および王見川氏の著作(王2007)を参考のこと。

2) 「仏教俗神」については、辜神徹氏の著書(辜2009: 25)の議論を参照。

1 清水祖師

清水祖師信仰は、現在、台湾で最もさかんである。台湾のいたるところで、清水祖師廟を見かける。また、ほかの神の廟に清水祖師が併祀されている場合も多い。

台北萬華の艋舺清水巖、三峡の清水祖師廟、淡水の清水祖師廟などは、規模の大きな廟としても知られている。台湾で「祖師廟」といえば、一部の例外を除いて、ほぼ必ず清水祖師廟を指すと考えても問題がないほど、その信仰は一般化している。特に、三峡の祖師廟は、全体の造りがたいへん凝っていて、建物それ自体が芸術品とされるほどである。

その本山は、福建泉州安溪の清水巖であり、広大な面積を有する廟である。いまでも、多くの参拝客が訪れる。

東南アジアでも、実際に目にする事の多い祖師廟は、清水祖師廟である。シンガポール、マレーシア、インドネシアなどの各地で、清水祖師が祀られているのを見ることができる。

それほど知名度が高いにもかかわらず、清水祖師の名は、日本ではほとんど知られていない。清水祖師の生平については、実際には不明な点も多い。林国平氏によれば、次の通りである³⁾。

清水祖師は、俗に「祖師公」「黒面祖師」などと称されているが、歴史上に実在した人物である。宋代に書かれた『清水祖師本伝』などの記載によれば、清水祖師の俗姓は陳、名は普足という。福建の永春県小岵郷の出身である。これはいまの福建永春県岵山鎮鋪上村にあたる。清水祖師は宋の慶暦五年（1045）に生まれ、幼くして大雲院において出家した。長じてからは、高泰山に庵を置くようになり、その後、大静山に行き、明禪師に従って学び、行が成ってからは、禪師の衣鉢を受けて再び高泰山に戻った。のちに麻草庵に移った。三十九歳になる以前、清水祖師の活動はほぼ永春県に限られている。元豊六年（1083）、安溪県蓬萊では、旱の害がかなり深刻であった。そのため、各所に祈雨のため助けを求めた。清水祖師はその求めに応じて招かれ、安溪において祈雨を成功させた。そのために、当地の人々は必死になって清水祖師を引き留めた。清水祖師はその求めに応じ、安溪の清水巖に移った。建中靖国元年（1101）に世を去った。

ただ、実際には俗名は陳昭であるとか、陳応であるとか、多くの異説がある。また修行僧であ

3) 林国平氏の著書（林2023：227-228頁）より引用。

っただけでなく、慈善事業を行い、橋を架けたり、道路を普請したという話も伝わっている⁴⁾。

のちに、清水祖師の信仰は、福建南方、すなわち閩南一帯に広まっていった⁵⁾。特に、泉州、漳州などの各地域でさかんであった。さらに、清朝になると、台湾や東南アジアへの移民とともに、それらの地域にも清水祖師の信仰が伝播していった。

東南アジアの主要な清水祖師廟については、黄海徳氏が次のように紹介している⁶⁾。

清水祖師の信仰は、海外の華僑・華人が住む地域で行われているが、特に東南アジア地域において強い影響力を有している。明清以降、シンガポール、マレーシア、インドネシア、ミャンマー、タイ、フィリピンなどの地では、相継いで数多くの清水祖師廟が建てられていった。主要な清水祖師廟は、マレーシアペナン島の蛇寺（すなわち青雲巖である）、大普公壇祖師廟、クアラ・ルンプールの清水祖師廟、インドネシアジャカルタのタンジョンキアット清水祖師廟、ミャンマーのヤンゴン福山寺、タイバンコクのタラートノーイの祖師廟、フィリピンマニラの祖師廟、シンガポールの蓬萊寺や鎮南廟などが挙げられる。そのなかでも、最も有名であるのはマレーシアの蛇寺であろう。

マレーシアのペナン島の蛇寺は、「蛇のいる寺院」として有名な観光名所になってしまっているが、本来は伝統的な清水祖師廟である。この蛇寺については、黄海徳氏が次のようにその経緯について述べている⁷⁾。

この廟は扁額に「青雲巖」とあり、マレーシアのペナン島にある。清の道光三十年（1850）に建てられたもので、安溪の祖廟から分祀された清水祖師廟である。左右の後殿には天后聖母と関聖帝君と福德正神を祀る。この廟が建てられてから、多くの蛇が入り出しては供物などを持っていくのが当たり前であったという。伝説によれば、清水祖師の誕生である正月七日から一週間くらいに、蛇の出現量が突然増えるとのことである。これらの蛇は毒性を持つもので危険であったが、なぜか廟のなかではおとなしく、人を傷つけることもな

4) 辜神徹氏の考察による。辜氏の著書（辜2009：16-17頁）を参照。

5) これについては、呉玉美「清水祖師信仰の流伝与延統——以南安翔雲鎮金安郷後池疔為例」、所収林緯毅編著（林2024：185-200頁）を参照。

6) この段は黄海徳「東南亜地区清水祖師信仰網路的形成及其特徴」、所収林緯毅編著（林2024：181頁）から引用した。

7) 前掲黄海徳「東南亜地区清水祖師信仰網路的形成及其特徴」、所収林緯毅編著（林2024：186）から引用。また筆者著書（二階堂2020：42-43頁）を参照。

かったという。当地の信者は、これを清水祖師の法力によるものと考えたという。

実際に訪れると、廟のなかには多くの蛇がいる。そのために「スネーク・テンプル」と呼ばれ、また蛇を観光客に巻きつけ、その写真を撮るという行為も行われている。



ペナン島清水祖師廟（蛇寺）*筆者撮影

むろん、廟内の蛇については、「危険」との注意書きが見られ、参拝者が触れないようにしている。もっとも観光客の側には、ここが清水祖師廟であるという意識はほとんどない。地元の参拝客との意識の乖離が大きい廟と言えよう。

マレーシアでは、クアラ・ルンプール近郊の高山の上に作られた彭亨雲頂高原清水巖廟も知られている。ここは1975年に作られた廟で、比較的新しいものである⁸⁾。クアラ・ルンプール近郊の観光地として有名である。

シンガポールの華人廟の場合は、また複雑である。

シンガポールは、聯合廟という特殊な形態の華人廟が多いからである。シンガポールの廟の多くは、都市開発の都合で移転させられ、もとの廟のあった位置からは移されてしまっている。また福建系、広東系などの全く由来の異なる廟が、ひとつの屋根の下に集められてしまっている。これについて、かつて筆者は次のように分析した⁹⁾。

このような大規模開発のなか、シンガポール各地に点在していた華人廟は政策により移転

8) 「雲頂高原清水巖廟」のサイト <https://www.chinswee.org/>、および「一廟一路」のサイト <https://www.angkongkeng.com/> を参照。

9) 筆者著書（二階堂2020：7-8頁）より引用。

させられることになった。天福宮や粵海清廟などの一部の伝統的な古廟を除いては、多くの廟が強制的に廟を集約させられた。そして「シンガポールの強制土地収用により、華人廟はその願いもむなしく、国家の権威と宗教の権威が衝突するなかで」、多くの「聯合廟」が作られることになった。(略) このような背景のもとに成立した聯合廟は、おそらくシンガポール独特の形態の廟である。しかしながらシンガポール郊外の大半の廟は、この形式をとっている。

そのため、シンガポールで見る清水祖師廟の大半は、この聯合廟の一部としての祖師廟となる。

多くの華人の参拝客が集まる廟として有名なのは、シンガポール北部センバワンにある、センバワン財神廟（三巴旺財神廟）である。この廟は、数個の廟から構成されるセンバワン聯合廟となっている。その内訳は、財神廟と、天后廟、それと清水祖師廟である蓬莱殿である。

この財神廟は、高さ9メートル半に近い巨大な財神像があることで知られている。ただ、その歴史自体は浅く、2006年に聯合廟となったものである。これについて、陳碧氏は次のように述べている¹⁰⁾。

センバワン財神廟はセンバワンの海軍街にある。貴重ではあるが、比較的新しい廟宇である。1998年に中国から分香して財神を持ち帰り、同年に手続きを行い、2001年に土地を買い入れた。シンガポールドル300万ドルで購入した2万平方フィートの土地に、2006年に建てられた。センバワン財神廟は、実際にはセンバワン聯合廟（そのほかのふたつの廟は、蓬莱殿とセンバワン天后宮である）のひとつである。ただ、この3つの廟はそれぞれ独立しており、その建築の様子も異なっている。構造も異なっているが、しかしそれぞれ占める面積は、ほぼ等しく、建物が並んでいるのは統一性がある。これは、シンガポールの聯合廟のまた別のひとつの特徴を示すものである。

参拝客が多いのは、当然財神廟のほうであるが、建物は並んで建っており、来る人は、みな清水祖師にも天后媽祖にも参拝していく。

ただ、2020年にこの財神廟は火災にみまわれ、設置物の多くが焼けてしまった¹¹⁾。離れていた

10) 陳碧氏の文章（陳2009：100頁）より引用。

11) 『The Straits Times』のサイト記事による。

<https://www.straitstimes.com/singapore/fire-breaks-out-at-sembawang-god-of-wealth-temple-on-friday->

天后宮などの被害は少なかったが、修理を行うのにかなり時間がかかっている。2023年になって、ようやく参拝が再開されることになった。



センバワン蓬莱殿清水祖師*筆者撮影

清水祖師廟である蓬莱殿の本殿の前には、守護神である趙將軍、王將軍、蘇將軍、李將軍の四將軍の像も置かれている。この四將軍は、別の廟では、張將軍、黃將軍、蘇將軍、李將軍となっている場合もある。四元帥と呼ばれる場合もある¹²⁾。

彼らが守護神となった経緯は、民間信仰の神によく見られるものである。すなわち、悪鬼として暴れていた者たちが、法力無双である清水祖師に降伏し、その後はかえって守護神となるというものである。これは媽祖の順風耳、千里眼の調伏の経緯と同じである。ただ清水祖師の場合は、道路を普請する際に岩石や砂を鬼どもに運搬させていたという話がある。これは日本における役行者の説話と酷似しており、ひじょうに興味深い。

センバワン蓬莱殿は、また本殿に三体の祖師像を置くのが特色である。この三体の像の経緯については、筆者は明確にすることができなかったが、金門島を調査した時に、清水祖師などを祀る李府將軍廟において、「清水祖師、清雲祖師、清彭祖師」が祭祀されているのを見たことを想起した¹³⁾。あるいは、清水祖師の兄弟とされるこれらの像である可能性もある。また、後述する三坪祖師と三代祖師の像が、のちに変化したものであるとも考えられる。

night

12) 石奕龍「清水祖師陳普足与清水巖寺」、所収林緯毅編著（林2024：49-50頁）を参照。

13) 金門島の李府將軍廟における像については、『金門日報』の記事「地方伝説・清水祖師伝奇」<https://www.kmdn.gov.tw/1117/1271/1274/36666/>を参照。

2 三坪祖師

三坪祖師もまた民間において祭祀される祖師のひとつである。清水祖師と同様に福建系の神である。

しかし、清水祖師に比べると、その知名度は格段に低い。その背景のひとつには、台湾などで三坪祖師の廟を見かけることが少ない、ということがある¹⁴⁾。

三坪祖師は、また三平祖師とも呼ばれる。名は三平義中、唐代の僧侶とされる。俗姓は楊氏。もともと福建北部で生まれたが、のちに漳州に移った。その後、会昌の廃仏に遭い、三平院に隠れた。三坪祖師が神格化されていった経緯は、清水祖師とよく似ており、生前に多くの人々を助けたことから、民に慕われたという。号は「広済大師」である¹⁵⁾。その生平については次の通りである¹⁶⁾。

積義中、俗姓は楊、唐の徳宗建中二年（781）に福建の福唐（いまの福建福清にあたる）に生まれる。十四歳の時に宋州の律師玄用に従って剃髪し、二十七歳の時に具足戒を受けた。のちに四方に雲遊し、百岩懷暉、西堂智蔵、百丈懐海、石鞏慧蔵などの高僧の教えを得た。最後には、潮州の嗣法、大顛宝通のもとで青原のもと三世となった。唐の敬宗の宝暦元年（825）、義中は師の命により、漳州に布教のために来ていた。しかしそれからすぐに、会昌の法難が勃発した。そのため、義中は門人を率いて漳州の山奥へと避難していった。そして三平山に寺院を建立した（いまの三平寺の起源はここにある）。宣宗の大中年間になってようやく、仏法は復興した。義中はその後、漳州開元寺の大徳となった。懿宗の咸通十三年十一月六日（872）に示寂した。

その本山は、いまでも漳州にある三平寺である。現在の三平寺は、大雄宝殿を備える一般的な仏寺とそう変わりはない。

台湾では、台南の広州宮、高雄の碧慈宮、屏東の塔楼祖師廟などが、三坪祖師を主祀とする。ただ、規模の大きな廟はそれほど多くない。

東南アジアでは、マレーシアマラッカの保安宮がよく知られている。規模も大きく、マラッ

14) 三平義中と三平寺については、永井政之氏の論考（永井2000：149-167頁）を参照。

15) 郭志超「由三平祖師談清水祖師對禪宗新質的貢獻」、所収林緯毅編著（林2024：39-40頁）を参照。

16) 張志相氏の論著（張2020：37頁）より引用。

カの大廟として知名度も高い。かつて筆者は、保安宮について次のように述べた¹⁷⁾。

マラッカの古い廟としては、ほかに保安宮（Melaka Poh Onn Kong）がある。正確な創建年代は不明であるが、推測によれば清の乾隆年間の造営という。一説には1856年の建になる。ただ、現在は新しく建て直されており、新しい廟である印象を受ける。主神は三坪祖師と、清水祖師、三代祖師である。また併祀されているのは、天后媽祖、朱府王爺、中壇元帥である。

マラッカにおける古廟として、保安宮はよく知られている。マラッカにはもうひとつ、衆安亭という三坪祖師廟が存在しているが、こちらは小さい。



マラッカ保安宮三坪祖師＊筆者撮影

三坪祖師については、その由来が曖昧になり、ほかの祖師と混同されるという状況が起きている。特に台湾では、清水祖師との混同が激しい¹⁸⁾。

保安宮で、三坪祖師、清水祖師とともに祀られている三代祖師についても、注意が必要であると考えられる。やはり福建の僧侶で、神として祀られることの多いものである。

三代祖師は、法号は林自超、宋代の僧侶である¹⁹⁾。これも、清水祖師などと混同されやすい祖師となっている。

17) 筆者著書（二階堂2020：39-40頁）より引用。

18) また張志相氏の著書（張2020：86-87頁）の記述も参照。

19) 三代祖師については、李俊緯『台湾三代祖師信仰与在地發展研究』、国立台南大学修士論文2022年を参照。

3 宋大峰祖師

もうひとつ、東南アジアの各地で強く信仰されているのが、宋大峰祖師である。宋大峰も、また廟で祀られることの多い僧侶である。こちらも、当然のように祖師号で呼ばれている。宋大峰祖師については、次の通りである²⁰⁾。

潮汕地域の善堂の祭神として最も普遍的な宋大峰とは、北宋末に閩の国から潮陽和平に入り、交通を阻んでいた河に橋をかけるなど数々の善拳を行ったとされる禅僧である。宋大峰は、一般に「大峰祖師」と呼ばれる。潮汕地域の善堂や祖師廟の中央に安置された大峰祖師は、おおむね頭に「毘盧冠（帽）」や「五方仏冠」と呼ばれる冠をかぶり、袈裟をまとった坐像である。坐り方は、座禅を組んでいるものが多いが、足を下に下ろし、椅子に座っているように見える像もある。左手で印を結び、右手を膝に載せているものもあれば、左手に笏のようなものを持っているものや、長い錫杖を持っているものもある。五方仏冠をかぶり、錫杖を持っている像は、地藏菩薩とよく似ている。

大峰祖師の像については指摘の通りである。またこれは、三坪祖師などの像にも似た面がある。大峰祖師については、また次のようにも伝えられている²¹⁾。

宋大峰祖師は、俗姓は林、名を靈噩といい、字（あざな）は通叟である。宋朝の宝元二年（1039）に生まれた。大峰祖師は剃髪して出家したのち、雲遊して潮州の潮陽県に至った。ここで、石の橋を作ったり、地元のために尽力し、また河水が溢れるなどの被害について、真摯に対応した。そのため、人々は祖師の事業を残し、その志を伝えるために、「報徳堂」を作り、慈善事業を展開した。

大峰祖師は、いわゆる善堂で祀られることが多いものの、シンガポールやマレーシアにおいては、一般的な廟で併祀されているのも見かける。これらの廟には、潮州出身者が深く関わっていることが多い。

シンガポールのイーシュン（義順）にある南鳳善堂は、大峰祖師を主神とする善堂である。

20) 志賀市子氏の著書（志賀2012：181頁）より引用。

21) 「南鳳善堂」のサイトより。<https://namhong.org/>

もともとセンバワンにあった善堂であるが、1984年にイーシュンへと移転した²²⁾。

主神は大峰祖師、脇には観音菩薩と地藏菩薩を祀っている。善堂らしい配置となっている。イーシュンのなかでも目立つ大きな廟であり、また参拝客も多い。

イーシュンには、聯合廟である忠邦聯合宮がある。こちらは、洪水港斗母宮、洪水港鳳山寺、関帝廟、華報善堂、複本堂という5つの廟から成る。このうち華報善堂が大峰祖師を祀る廟である。



イーシュン華報善堂大峰祖師*筆者撮影

これらの華人廟も、1990年代になってから忠邦聯合宮を組織して、この地に移転してきたものである。斗母宮は九皇大帝を祀る廟で、関帝廟は関帝を祀る。鳳山寺は広沢尊王の廟である。複本堂は、もとは真空教の堂である。みごとに、由来も出自も異なる廟の組みあわせから成っている。

華報善堂には大峰祖師を祀るが、こちらはほぼ単独の像になっている。同じ構造の建築であるためか、関帝や広沢尊王と変わらない民間信仰の祭神に見える。

シンガポールのマクファーソン駅の周辺に、また聯合廟がある。こちらは、韭菜芭城隍廟を中心とする一連の廟が並ぶ区画となっている。1984年に聯合廟を形成し、この地に移ってきた。城隍廟のほか、鳳玄宮、閻苑岩から成っている²³⁾。

韭菜芭城隍廟は、この付近を代表する廟としても知られており、廟会以外にも様々な活動を

22) 筆者著書(二階堂2020:94-95)においても紹介した。また「南鳳善堂」のサイト <https://namhong.org/> も参照。

23) 陳碧氏の文章(陳2009:100頁)を参照。また「韭菜芭城隍廟」のサイト <https://member.shtemple.org.sg/> も参照のこと。

行っていることでも有名である。新しい廟ではあるが、シンガポールを代表すると言っても過言ではない大廟で、おびただしい数の神々を祀っている。

この区画に、金鳳廟と衆弘善堂があり、その一角に九皇大帝を祀る九皇宮がある。九皇大帝が中心であるものの、隣には大峰祖師と感天大帝を祀る。



マクファーソン九皇宮大峰祖師*筆者撮影

シンガポールのゲイラン（芽籠）地区には数多くの華人廟があるが、そこに同敬善堂という大きめの善堂がある。ここも大峰祖師を祀るところである。

マレーシアでは、クアラ・ルンプールの南洋同奉善堂が知られている²⁴⁾。

主神は大峰祖師である。ただ興味深いのは、脇には薬神として知られる華陀が、「華陀仙師」として従っており、また二郎神が「護天元帥」という名で脇にある。ただ二郎神が配置される経緯が不明である。かつて、禪宗寺院では二郎神が伽藍神として置かれていたが、その流れをくむものであろうか。

宋大峰祖師信仰は、東南アジアの各地において、清水祖師と同様に強い勢力を有している。そのため、祖師という称号が、清水祖師のみを現すものとはなっていないようだ。

4 その他の祖師

このほかにも、東南アジアでは多くの「祖師」が存在するが、そのうちのいくつかについて検討したい。

シンガポールのタンピネス聯合宮（淡浜尼聯合宮）は、数多くの廟が元になって形成された

24) 「一廟一路」のサイト <https://www.angkongkeng.com/> を参照。

廟で、建物がひとつに統一された形となっている。筆者は、この廟について、かつてこう紹介した。

タンピネス聯合宮の場合は、ほとんど元の廟がわからないほど、ひとつの建物に組み入れられた形の廟となっている。その元の廟は福安殿、順興古廟、吉星亭など13箇所にのぼる。朱・邢・李大人を主神とする福安殿に、多くの廟が編入されたような形になっている。

この廟の特殊性については、ほかにもいろいろ議論がある²⁵⁾。また祭祀される神々については、その考察がひとつの論文集にまとめられている²⁶⁾。

タンピネス聯合廟の祭神は、玉皇大帝、朱・邢・李大人、大伯公、太歳、普庵古仏、清水祖師、洪仙大帝、南海観音、蔡府王爺、五營將軍、張公聖君、孔子、大二爺伯、虎爺となっている。儒教系、道教系、仏教系、地方民間信仰の神々が、それぞれ入りまじる形で祭祀されている。東南アジアにおいては、官製の孔子廟が設置されないことから、一般の廟に孔子が学問の神として入ってくる場合が多い。



タンピネス聯合宮普庵祖師*筆者撮影

ここで注目したいのは、清水祖師と普庵古仏である。普庵は、ここでは古仏と称されているが、一般的に普庵祖師と呼ばれることが多く、これもまた祖師のひとつとされる。

普庵祖師については、次のように事績が伝わっている²⁷⁾。

25) これについては、陳英傑氏の論文（陳2015：219-256頁）を参照。

26) これについては、論文集（林2014）所収の論文を参照のこと。

27) 吳永猛「普庵禪師与民間信仰」、《『仏教与中国文化国際学術会議論文集』1995年、487ページから引

普庵禪師は、諱を印肅、普庵は号である。北宋徽宗の政和五年（1115）十一月二十七日に生まれた。袁州の宜春の出身である。姓は余氏。南宋の紹興四年（1134）に寿隆院の賢和尚に従って出家し、紹興十一年（1138）に落髮、翌年の五月に袁州開元寺で受戒した。容貌魁偉で、智慧に優れていた。賢和尚はこれを重んじて、まず『法華経』を学ばせた。紹興十三年には湖湘に遊学し、瀉山の牧庵法忠禪師に学んだ。その教えを受けて思うところがあり、のちにまた寿隆院に戻った。紹興二十三年、普庵禪師は二十九歳となり、請われて慈化寺の主となった。その生活は清貧であった。ある日、禪定が終わり、『華嚴経』を読誦していたところ、豁然として大悟した。これよりのちは、各地から訪れる参拝客に対して問答し、偈語をもって多くの人に示した。教えを説くのみではなく、寺院の営繕にかかわり、また災害を防ぐため尽力した。病気の人々には薬水を施した。孝宗の乾道五年（1169）七月二十一日に沐浴し、結跏趺坐ののちに示寂した。年は五十五であった。

普庵祖師は早くから神僧としての扱いを受けており、『三教搜神大全』にも伝が載せられている。清水祖師や大峰祖師とやや異なるのは、信仰の範囲がかなり広いことであろう。どちらかという信仰のあり方は、万廻祖師、済公祖師などと近いかもしれない²⁸⁾。

ただ、普庵祖師は法師からも尊崇され、独自の地位を持つという特色もある。「普庵教」とは、福建の西北部で法術を行う「法師」の一派である²⁹⁾。この法師たちが重んずるのが、強大な神通力を持つという普庵祖師である。もっとも、シンガポールやマレーシアでは、法師が閩山教の張公聖君を祀る廟は数多く見かけるものの、普庵祖師を祀るところはあまり見かけない。

もうひとつ、東南アジアの廟で見かける祖師には、慚愧祖師がある。この神を主神とする廟は少ないが、併祀する場合はある。マレーシアジョホールの鑿靈宮は、慚愧祖師を主神とするとされる³⁰⁾。

慚愧祖師も、やはり清水祖師と同じような性格を持つもので、寺院より廟で祀られることが多い。台湾では、南投に廟が集中している。こちらは、客家の移民により形成された地域とされている。南投一带に限っては、「祖師廟」は清水祖師廟ではなく、慚愧祖師廟を指すものとな

用。サイトは https://www.chibs.edu.tw/ch_html/bcc/an019_26.htm

28) これらの神僧と普庵については、永井政之氏の著書（永井2000）を参照。

29) 蘇瑞隆氏の論による。詳しくは、蘇瑞隆「新加坡淡濱尼聯合宮後池疇の普庵古仏信仰及其源流」、所収林緯毅編著（林2024：81-99頁）を参照。

30) 星洲網の記事「鑿靈宮為慶祝慚愧祖師聖誕遊神隊伍繞境居鑿」2023年5月14日 <https://johor.sinchew.com.my/news/20230514/johor/4677182>を参照。

っているようだ。一般に慚愧祖師は唐代の僧侶とされている³¹⁾。

慚愧祖師は、陰那山開山の祖である。俗姓は潘、名は了拳、別号が慚愧である。福建の延平沙県出身である。父の名は徳彰、母は丘氏、家は代々仏法を好み、夫婦もよく喜捨を行っていた。祖師は夕刻に生まれ、そのときは祥雲が家を覆ったという。時に唐の憲宗元和十二年三月二十五日であった。生まれたとき、左手の拳を握ったままであった。そのため、名を拳とした。ところが三日後に、ある僧侶が家を訪ねてきた。父は祖師を抱いて僧侶に示すと、僧侶は名を問うた。拳と名付けたと聞くと、「了」の字を書き付けた。すると左手の拳が開いて、指を伸ばせるようになった。それにちなんで、了拳と再度命名した。

その本山は、広東梅州の陰那山靈光寺である。いまでも大きな伽藍が残っているようである。慚愧祖師も、清水祖師やその他の祖師同様に、禪師でありながら、一般の廟で祭祀されることの多いものである。もっとも慚愧祖師の事績の詳細については、まだ不明な点が多いようである。

結 語

東南アジアでは、このような清水祖師、三坪祖師、大峰祖師、普庵祖師、慚愧祖師、三代祖師といった多くの祖師たちが、寺院ではなく、華人廟に祀られている。民間信仰においては、仏菩薩も、高僧も、仙人も、神も、区別せずに崇拜の対象としているため、道教と仏教の違いもあまり気にせず、ほぼみな神としての同列の扱いになってしまっている。

ここで使われている祖師という語は、日本のような、開宗、あるいは開山の祖師の意味とは違うと述べた。ただ、清水祖師は清水巖の開山祖師であり、三坪祖師は三平寺の開山、慚愧祖師は靈光寺の開山である。そういう意味では、これを「祖師」と称するの、それなりに理由があるものと考えられる。

東南アジア、特にシンガポール・マレーシアと台湾における祖師信仰は、よく似た部分もある。ただ、台湾では清水祖師などの福建系の一部の神の信仰が強くなりすぎている面がある。東南アジアにおいては、潮州系の大峰祖師などの信仰も強く、極度にバランスが失われてはいないように思える。また台湾では清水祖師が強くなりすぎて、三坪祖師廟の主体が入れかわってしまうなどの現象が起きているが、東南アジアではあまりそういった事例はない。

もっとも、東南アジアでも、シンガポールの多くの廟が聯合廟に再編させられてしまったよ

31) 張志相氏の著書より引用。著書（張2020：103頁）より。

うな、伝統をいったん断ち切るような現象も起こっている。

本論ではふれなかったが、教派宗教の開祖や重視する神仙を、祖師と称することがある。たとえば、金英教の祖は金英祖師と呼ばれ、真空教の祖は真空祖師と称されている。こちらもシンガポールやマレーシアに多くの廟があり、別の意味で、重要な祖師信仰であると考えられる。ただ、これについては教派宗教との関係が複雑であることから論の対象外とした。これらの教派宗教の祖師については、また別の機会に論じたい。

【参考文献】

- 二階堂善弘『東南アジアの華人廟と文化交渉』、関西大学出版部（関西大学東西学術研究所研究叢刊60）
2020年
- 酒井忠夫編『東南アジアの華人文化と文化摩擦』、巖南堂書店 1983年
- 永井政之『中国禅宗教団と民衆』、内山書店 2000年
- 志賀市子『〈神〉と〈鬼〉の間——中国東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』、風響社 2012年
- 志賀市子編『潮州人——華人移民のエスニシティと文化をめぐる歴史人類学』、風響社 2018年
- 王見川『従僧侶到神明——定光古仏・法主公・普庵之研究』、円光仏学研究所 2007年
- 辜神徹『台湾清水祖師信仰——落鼻祖師的信仰与文化』、博揚文化公司 2009年
- 劉家軍・謝慶雲主編『清水祖師文化研究』、厦門大学出版社 2013年
- 林緯毅主編『淡浜尼聯合宮崇奉諸神——国際学術研討会論文集』 2014年
- 張志相『三坪与慚愧祖師研究』、豊饒文化社 2020年
- 林国平『閩台民間信仰源流』、万卷楼図書公司 2023年
- 陳碧「新加坡華人廟宇探訪」、『尋根』2009年4期、96-100頁
- 陳英傑「宗教空間的改造：新加坡淡浜尼聯合宮的『道教化』」、『国立政治大学学报』第43期 2015年、219-256頁